

最近、排尿機能に関する新薬が4つ発売されました。3つは過活動膀胱(Overactive Bladder: OAB)をターゲットにした抗コリン剤で、もう1つは前立腺肥大症に対する α 1遮断剤です。排尿機能に関する新薬が4つも相次いで発売されたということで、改めて排尿障害という概念が脚光を浴びています。この新薬発売の背景には、排尿障害を有する患者さんが多数存在することに加えて、既存の薬物治療では症状の改善が認められず、より効果的な薬物が必要とされている現状があります。高齢化社会を迎えつつある現在の日本において、排尿機能障害が、生活の質(QOL)に関する極めて重要な問題であることは間違いありません。日本排尿機能学会の調査では、40歳以上の人口6640万人の12.4%にあたる810万人もの方がOABに相当すると報告され、このうち430万人が尿失禁を伴うwet OABであったとしています。また排尿障害を来す疾患には、神経疾患はもとより、加齢とともに増加する前立腺肥大症や、女性に多く認められる尿失禁、激しい疼痛を伴う間質性膀胱炎など様々な病態が含まれます。本セミナーでは泌尿器臓器の解剖、排尿検査に加えて、これらの病態を詳しく解説するとともに、実際の患者さんとの懇談や手術見学を交えて、排尿障害の実態を十分理解していただけるようプログラムを作成しました。多くの参加を期待しております。